

アドベンチャーへの 片道切符

ジェラルド・ダレル

佐藤百合子訳



アドベンチャーへの片道切符

昭和48年12月10日 初版発行

¥980

訳者 佐藤百合子

発行者 竹下みな

印刷所 三倉印刷
製本所 株式会社小林製本

発行所 株式会社 評論社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町2ノ16

電話代表 (265) 1961

振替東京 7294

(検印省略)

アドベンチャーへの片道切符



ダレル

藤百合子

友人ボブ＝ロバート・ロウズへ

ギアナへの動物採集旅行の思い出に！

Three Singles to Adventure

by

G. Durrell

Illustrations by Ralph Thompson

Original English language edition published
by Rupert Hart-Davis Ltd., London

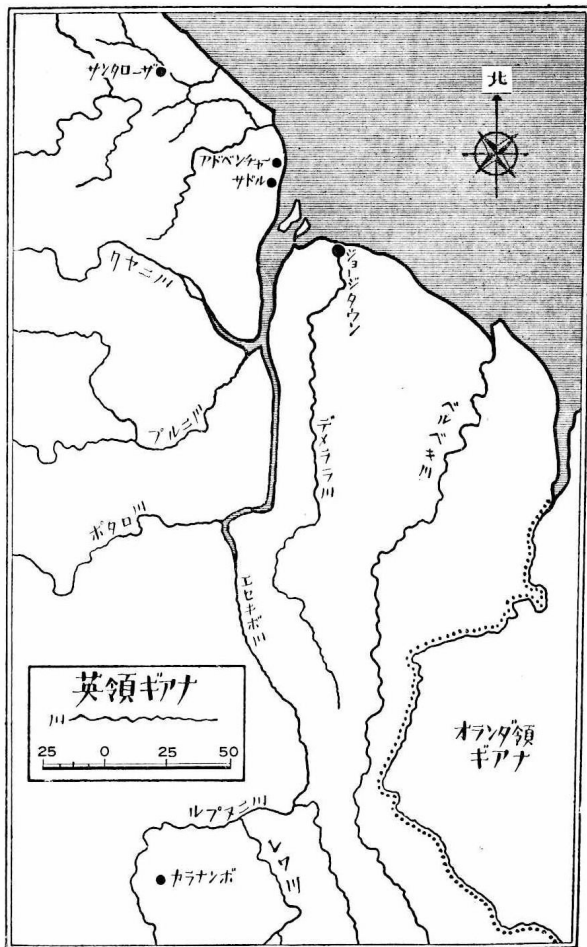
Copyright © 1961 by G. Durrell

Japanese translation rights arranged through
Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo.

	はじめに	7
1	アドベンチャー村へ	9
2	蛇とサキざる	20
3	赤いほえざると兵隊ねずみ	46
4	凶暴な有袋動物となまけものの声	70
5	巨大な淡水魚とかめのたまご	99
6	ありくいを追つて	124
7	カピバラと南米ワニ	154
8	かに食い犬と大工鳥	180
9	背に小袋がならんでいるひきがえる	209
10	ピン普拉豚とアリガタヤ	228
	おわりに	247
	あとがき	255

アドベンチャーへの片道切符

作・G・ダレル
訳・佐藤百合子





はじめに

一九五〇年に私はケネス・スミスと二人で英領ギアナへ旅行した。この南米の一隅に棲息する鳥類・哺乳類・爬虫類・魚類を採集し、それらを生きたままでイギリスの方々の動物園へ持ち帰ることがこの旅行の目的であった。この本はその時の旅行記である。

世間の多くの人たちは、そのような旅行で一番むずかしいことは、動物をつかまえることだろうと思っている。そして獣どもをつかまえて檻の中にはうりこんでしまいさえすれば、それで仕事は終わったようなものだろうとも思っている。しかしこれは誤解であり、実際には、つかまえてからそれを無事に生かしておくことが容

易な仕事ではないのである。

このような動物採集旅行の間には、いろんな冒険ぼうけんがあり、そのうちにはおもしろかったことや、こわかったことや、ひどくいまいましかったことがあるものだ。しかし、採集旅行中の多くの月日は、平凡な仕事や心配事が続くのである。ところがその旅行記を書くことになって机の前に向かうと、旅行中のこまごました悩み事やいまいましかったことはあまり思い出されず、おもしろかったことばかり書き綴つづることになる。そしてスリルに満ちたことや、おもしろくてたまらぬことばかりあったような印象いんしょうを読者に与あたえがちである。たしかに仕事がたいへんおもしろくはなやかなことも時々あるが、仕事のことで気がめいたり、くじけたり、がっかりしたり、いやになったりすることもある。それでも、一つだけはっきり言えることは、どんなときにも退屈たいくつではないということであり、この点があるからこそ他のどんな仕事よりすばらしいのである。



Ⅰ アドベンチャー村へ

ジョージタウン「英領ギアナの主都」の裏通りのちっぽけなバーで、私たち四人は一つのテーブルをかこんでラム酒やジンジャービールをちびちびやりながら、一つの問題を考えていた。テーブルの上にはギアナ地方の大きな地図が広げられ、四人のうちの誰かがときどきまゆをひそめてはその地図をじっとのぞきこんだ。この地図には私たちの心をひきつける地名がいくつもあるのだが、その中から奥地への動物採集旅行の第一回めの基地として適したところを決めるのが、当面の問題

であった。およそ二時間も私たちは決めかねていた。私はこの地図の中の河川や山脈を目で追ひ、またボメルーン、マザルニ、カヌク、バーバイス、エセキボなどのすばらしい地名をうっとりながめていた。

「ニューアムステルダムはどうかね？」とスミスはまったく平凡な地名を言った。

私はいやな気がした。ボブは頭をふった。アイバンはぼかんとしていた。

「それじゃ、マザルニはどうかね？」

「水びたしさ。」ボブはひとこと言った。

「ギアナは『水の国』という意味のアメリカインディアン語なんだ。」私はガイドブックに書かれていることを、うきうきした気分で行用した。

「どこかに決めてくれよ。僕たちはもうなん時間もここにすわっているんだよ。後生だからもう決めてしまつて寝ることにしようじゃないか。」スミスはいら立った。私はアイバンに尋ねることにした。彼は一時間も口をはさまずに、うっとりした気分であるようにみえた。

「アイバン、君はどう思う？　なんといったって君はここで生まれたんだし、いろんな動物をつかまえるのに一番いい場所を知っているはずだろう。」

アイバンは夢うつつから目ざめ、しぶい顔つきになり、当惑したような表情をうかべた。

「えー、旦那様、」彼は口をひらき、現地なまりのない声で言った。「私はあなたがたがア

ドベンチャー「冒険村」に行かれたらいいと思います。」

「どこ？」と、ボブと私は同時に言った。

「アドベンチャーです、旦那様。」彼は地図の上の一点を指さした。「エセキボの河口近くで、ちょうどこの辺の小きな村ですよ。」私はスミスの顔を見た。

「アドベンチャーに行くぞ。」私は断固として言った。「そんな名前のところにこそ行くべきなんだ。」

「よからう！」と、スミスは言った。「さて、この話はすんだから寝ることにしようや。」

「やつには感情がないんだね。」ボブは残念そうに言った。「アドベンチャーという言葉を書いてもやつは何も感じないんだな。」

この刺激的な名前の村へ行くことは思ったより容易であることがわかった。ジョージタウンの波止場に行つて切符を手に入ればそれでいいのである。アドベンチャーに行くのに切符を買うなんて、しかもそこへの旅が大きくてぶかつこうなフェリーボートに乗ることから始まるなんて、いくら文明の今日でもちょっとびつたりしない感じがした。癡猛な戦士が操つるカヌーにでも乗ってはなばなく出かけるべきことのように私には思えたからである。

ある晴れた朝早く、ボブとアイバンと私とはいろんな風変わりな旅行荷物といつしよにタクシーで波止場についた。私の同行者たちが運転手と適正料金について言い争っているあいだ

に、私は出札所に行つた。

「アドベンチャーへの片道切符三枚下さい。」私はできるだけ何げない顔つきで言った。

「はい、お客さん、一等ですか、二等ですか？」事務員は言った。

この返事に私は閉口した。アドベンチャー行切符を買えることがすでにいやな感じなのに、一等か二等かが問題になるなんてひどすぎた。私はそこへ行く価値があるのかどうかさえあやぶみはじめた。そこは映画やスナックバーやネオンやその他あやしげな文明の利器に満ちた盛大な海辺の保養地かもしれないのである。ふり返ると、アイバンがうず高く積まれた私たちの荷物のそばをうろろしていた。私は彼をよんで乗物の等級を相談した。彼の説明によると、二等ならフェリーボートの船底のどこかに大勢の人といっしょに入れられ、そのあと、川汽船の船底に入れられるが、一等なら、フェリーの上甲板のおんぼろ椅子にすわる特権が与えられるし、また、川汽船では昼食のサービスもあるということであつた。それで、私はアドベンチャー行きの一等片道切符三枚を買うことにした。

私たちはデッキの上に私たちの風変わりな荷物を積み込んだ。それからまもなく、フェリーは出発し、デメララ川の暗褐色の水面一帯をびりびり震わせながら進んで行つた。ボブと私はてすりに寄りかかつて、船跡の上を小さなかもめが悲しげに飛びかよふのをみつめていた。

「ジョージタウンを出られてよかったな。」とボブは無心にバナナの皮をむきそれを船跡の

中に投げ込みながら、ため息まじりに言った。「いいね。また未開地にいけるんだな。窮屈な思いをしなくてよくなるんだね。のんびりするには未開地に行くのが一番なんだ。」

私は黙ってうなずいた。が、内心ではボブが動物採集の仕事をはんの少しでも知っているのかどうかあやぶんだ。彼の言葉から察すると、採集者はハンモックの中に寝ていて、動物の方が自分で檻の中に入ってきてくれるとも思っているようだった。私は、ジョーシタウンからもう少し離れてしまうまで、彼の幻想をこわさないでおくことにした。

ボブは画家で、いろんなアメリカインディアン種族の絵をたくさん描くつもりでギアナにやってくるに決まっていた。しかし彼は、ギアナに来てみると、彼が行きたいと思う地方はどこも水びたしで、河川をわたることはできそうもないことがわかった。彼はジョーシタウンから出ることができず、ノアのように洪水がひくのを待っていた。このとき彼と私たちが出会ったのである。もうすぐ奥地に向かって第一回目の出撃を敢行するのだという私の話をきいて、彼は浅はかにも（この点が彼らしいところだが）いっしょに行くと言いだした。彼の話だと、ジョーシタウンにすわって待つより動物採集旅行に行く方がおもしろいだろうし、その旅行から帰って来れば洪水はひいていて、インディアンの絵を描くために出かけられるはずであった。不幸なことに、彼はその後自分の目的をはたすためにあるき回ることはなかった。彼はギアナに滞在中ずっと、私のいろんな奥地旅行に同行した。その間、彼にはキャンバスに画筆をおろす暇はな

かったし、しまいには、彼はそのキャンバスも持つてはいなかった。それは、空輸用の蛇入れ箱をつくる材料になつてしまつたのである。彼は、いろんな風変わりな鳥類・獸類・爬虫類にかこまれて眠りかつ食事をしなければならなかった。また、彼は川や湖を泳ぎ渡つたり、湿地を踏み渡つたり、汗を流したくたになつて、かき傷打ち傷をつくりながら密林や草原を押し分けて進まねばならなかった。このような運命は出発当初に私にはわかつていたのだが、ボブは動物採集家といっしょになつていくことが彼にとってはどんなにひどいことを意味するのかを、私たちにきこうともしなかったのだ。

フエリーはデメララ川の対岸の石垣波止場にぼんぼんともったいぶつた音をたてながら近づき、止まつた。そこで私たちは荷物をのんびりとおろしはじめた。アイバンが波止場に立つていて、私たちが一つ一つ手すりの上から彼に荷物を投げ渡していった。それが全部終わると私たちは下船してアイバンといっしょになつた。すると、たるの上にすわっていたひとりの貧相な男が、大儀そうにやつて来て尋ねた。「旦那方はパリカ行き列車にのるんかね?」

私はうなずいて、停車場に荷物をはこぶ手段を見つけたと言つた。するとこの「のらくら者」は少し元気になつて、「旦那方はいそがなくっちゃ……列車は一〇分前に出たことになつてゐるから。」と言つた。

「たいへんだ!」私はうろたえた。「停車場までどれくらいある?」

「半マイルだね。旦那方のためにトラックをつかまえてくるよ。」と言って、のらくら者は姿を消した。

「列車に乗り遅れたらどうなるんだ、アイバン？ あとで別のが出るのかね。」

「いーえ旦那様、乗り遅れたら明日の朝まで待たなくちゃなんのです。」

「なんだって、ここで待つって？ でも、どこで寝るんだ。」ボブはあたりを見廻しながら言った。

あたりには泥だらけの河岸と、二、三軒の荒れはてた小屋があるだけだった。

アイバンがボブに答える前に、例ののらくら者が古ぼけた荷車をひっぱってよろよろともどってきた。

「旦那方、急がなくなっちゃ、」と彼は息を切らしながら言った。「汽車が出るところだよ。」

私たちが気が狂ったようになって荷車の上に荷物を積んでいたとき、遠くの方でシューシューポーポーと蒸気圧を上げていく音がきこえた。私たちはその音のきこえる方に向かって駆けおりて行った。そのあとから、息を切らした例の男とアイバンとが荷物を押してがたがた音を立てて走ってくる。私たちは汗を流し息せき切って停車場に駆け込み、プラットフォームに集まっていたいろんな人種の人たちに一斉に注目された。顔を赤くし髪をふり乱した私たちに対し、彼らのうちにはやじるような声を出すものもいたが、そこで私たちの荷車が大きな石にぶ